

「私とつながる木の話」

しばらく、旅に出ることにしました。

でも、心配しないでください。これから、私は貴方に手紙を送ります。

色々なとき、色々な場所から。

そしてこれが、最初の手紙です。

今、私は一本の木の下にいます。初夏に橙色の実をつける枇杷の木。

この木が、私にくれたお話をしましょう。

貴方も知っている通り、私にはいわゆる「ふるさと」がありません。

まるでサーカスの子どものように、引越しが多かったから。

友だちに「出身地はどこ？」と聞かれると、いつもどう答えてよいかわからなかった。それをなんとなく、心細く感じていました。

転機が訪れたのは、東京の大学を卒業した時のこと。

私は偶然にも、子どもの頃5年間を過ごした福岡で働くことになりました。

そこで昔の友だちに連絡をとってみた私は、こんな話を聞きました。

「昔あなたが住んでいた家の枇杷の木、まだ、あるらしいよ」

昔むかし、私たち家族が住んでいた家には、小さな庭がありました。

私と母はそこにささやかな畑をつくり、野菜や花を育てるのが楽しみでした。

トマトが赤く実った夏のある日、私は生まれてはじめて枇杷の実を食べました。

少し楕円形の丸みを帯びた、橙色の実。皮を薄くむいて、口に入れてみると・・・、

かすかに甘くて、みずみずしい。大好物のスイカともブドウとも違う初めての

味に、私はすっかり魅せられてしまいました。昔から、食いしん坊だったのね。

そこで思いついたのは・・・種を植えたら、大きな木になって、毎年好きなだけ、枇杷が食べられる！ということ。

早速その日、口に残った茶色い種をひとつ、埋めました。

奇跡的に芽を出した枇杷の木は、日当たりの良い庭ですくすくと成長していき

ました。私が近所の犬と遊んだり、シャボン玉をしたり、はじめて恋をした日々となり

に、枇杷の木はいつもあって、緑色の葉を茂らせていきました。

宝物をかくしたのも、死んだ金魚を埋めたのも、その木のそばでした。

恋が実りますように、とお祈りすることもありました。

その木があることが、いつもなんとなく安心でした。

ただ、ひとつ計算ちがいだったのは、木が実をつけるほどに大きくなるには、予想した以上に時間がかかる、ということ。

小学二年生の春、私は東京の学校に転校することになり、その家を離れてしまった。楽しみだった橙色の実を食べることができないまま。

その木が今もまだあるなんて！私の心の豎琴は、ざわめきました。まるで初恋の人にでも、再会するように。

夏休みを待って、私は飛ぶように旅に出ました。

昔の記憶を頼りにそれらしき番地に向かい、子供の頃ははずいぶんと急に感じた短い坂を上ると、待っていたのは昔と変わらぬ佇まいの家と、緑の葉をたくましく茂らせた枇杷の木でした。

そのたくましさは本当に想像以上で、枝は家の屋根をはるかに越えていて、緑の葉陰には、橙色の実が鈴なりになっていました。

私は木に駆け寄り、そっと、なつかしい、なつかしい幹に触れました。

すると、子ども時代の思い出が、次々とあふれてきたのです。

縁日で買ってもらった赤いガラスの指輪のこと。(本物のルビィだと思っていたたの。おかしいでしょ?) はじめて書いた、ラブレターのこと。

どれも子ども時代特有のきらきらに包まれていたときの、記憶。記憶・・・。

家の人が留守なのをいいことに、私はひとつふたつ、実をもいで食べてみました。昔と変わらぬ、どこかはかないような薄甘さ。子どもの時代の味。

しゃくしゃくと、枇杷を咀嚼しながら空を見、庭を見、していると、家のドアが開き、あの頃の自分が今にも駆け出してくるような気がして、私は長い間、木の下に座っていました。幹にもたれ、見えない力を充電するような気持ちで。

そして、思ったこと。

わたしのふるさとは、ここにつながっている、ということ。

私がいなくなった後も、この木はずっと変わらずここにあって、育っていてくれた。私と同じ時を刻みつづけてくれていた。

そう思うと、自分の足元に、強い根っこが生えたような、新しい力がわいてくるのを感じました。

今、貴方はきっとあの、東京の家にいるのでしょうか。ふるさとの匂いを消した人たちの住む、コンクリートの街に。

でもきっと、私にとっての枇杷の木のような存在は様々に形を変え、誰の心の中にもあるのでしょうかね。

そう、貴方に秘密にしていたことを、ひとつ、告白します。
時々疲れたと言って家を出ることがあったでしょう。そんな時、私は枇杷の木を探しにいていたのです。
枇杷の木に逢うと、私は乾いた幹に額をあてる。すると、まるで目に見えない花で編まれたレイを、そっと首にかけてもらったような気持になるの。とても、素敵な気持ち。生きる力が、海のように私という器に満ちていくのを感じる。満ちて満ちて、それがいつか、あなたの海にも届けばいいのにとおもいます。

これが、貴方への初めての手紙です。私の言葉は、貴方に届いている？
これから私が紡いでいく言の葉のひとつひとつが星となり、貴方の心に結ばれていきますように。

P.S.

あなたのふるさとは、どこにありますか？
いつか そっと、おしえてください。